

第1回 ハヤヒナ合同本



(表紙イラスト ピーすけ)

※この合同誌は、「ひなゆめファンの止まり木」内で7月末まで募集した原稿をまとめた、有志による「ハヤヒナ合同本」です。

※第1回ワイ杯クイズ大会(ロッキー・ラックーン氏主催)優勝の副賞として、本誌の原稿の掲載順をRIDEさんに決定していただきました。

公開サイト:ひなゆめファンの止まり木 (<http://soukenshi.net/perch/>)

企画趣旨説明・小説投稿掲示板 (<http://soukenshi.net/perch/hayate/myself/patio.cgi>)

第1回 ハヤヒナ合同本 目次

恋の季節

みつちよ

4

ヒナギクと呼びなさい

双剣士

16

まんまるまるまる

ピーすけ

34

カレーの天使

ロッキー・ラックーン

44

extra nightmare

春樹咲良

61

あとがき

編集後記

75 69

(著者名は敬称略)

恋の季節

みつちよ

7月も終わりに近づきうだるような暑さが体を焼く8月がもうすぐやってくる

夏と言えば、学生ならだれもがわくわくして待ち焦がれている

そう、夏休みだ！

海、川、山など自然と触れ合うにも最高の季節

スイカや夏野菜、冷たいかき氷などおいしいものが増える季節

でも、やっぱり恋！

熱い恋の季節である事も忘れてはならない

「ハヤテくん、こっちこっち！」

いつもの執事服姿からは見慣れない浴衣姿の彼に手を振る

「ヒナギクさん！」

ハヤテくんがこつちに気づいて手を振りながら駆け足で階段を上ってくる

下駄の音がこつん、こつんと近づいてきて私の目の前で止まった

「お待ちせしてしまつてすみません」

彼の優しい空色の瞳が申し訳なさそうに下がった

くすっ可愛いなあ、女の子みたい

私、負けちゃいそうじゃない？

「いいわよ。私も今来たところだし、それより早く行きましょ」

彼の腕に両手を絡めて、にこりとほほ笑む

あ、ちよっとだけ頬紅くなった

「ヒ、ヒナギクさん!？」

「ダメ？」

ちよっと意地悪してみる

胸は当てるほどないけど……こういうのは気分よ、気分

「ダメじゃ……ないです……」

「よかった」

照れてるハヤテくんホント可愛いなあ
子犬みたい

「い、行きましょうか」

「うん！」

まだ、恥ずかしいみたいだけどせっかくお祭りに来たんだし
楽しまなきゃ損じゃない

「ヒナギクさん、どこから回ります？」

「そうね、とりあえず…」

あたりを見渡してみる

お面とか射的、金魚すくいと王道なものが並んで

わたあめ、イカ焼き、焼きそばなどの匂いが混ざってザッお祭りって感じだ

「うーん」

これだけ、出店があると結構悩むもので、決まらない

「ハヤテくん、どこ行きたい？」

結局、彼の判断に任せることにした

「え、ええっと。僕はヒナギクさんが行きたいところで……と思ったんですけど」
わかってはいたが彼らしい答えが返ってきて、自然と笑顔になる

「そっか……うーん、じゃあ」

直感と王道で射的に挑戦することにした

「射的ですか。僕、結構得意なんですよ」

「そうなの？」

「はい！ ヒナギクさんどれか欲しいのとかありますか？」

「じゃあ、あのうさちゃんがいいな。右の一番上」

手に収まるくらいの青いうさぎのぬいぐるみを指しながらハヤテくんと言うと

「あれですね、了解です」

射的に自信ありと答えてただけあつて5発の弾のうち3発で見事うさぎをゲットした

「兄ちゃんやるね！」

「あはは、ありがとうございます」

ハヤテくんが店のおじさんからうさぎを受け取る

「どうぞ！」

「ありがとう！ハヤテくん！」

うさぎをぎゅつと抱きしめる

青うさぎはどことなくハヤテくんに似てる気がする

「この子、ハヤテって名前にしてもいい？」

言いながらうさぎにチュッ

「ダメ？」

「えっ?!」

うさぎの手を使って「ダメ？」のポーズをとる

「い、いいですよ。でも、ちよつと妬いちゃいそうです」

照れ笑いを浮かべながらハヤテくんは頬をポリポリ

「一番はハヤテくんだよ？」

「どっちのですか？」

「うさぎのほう」

「えっ?!」

「冗談よ、冗談」

私がかくすくす笑うと「ひどいですよお」とちよつと怒り顔

「ごめんね？ 反応が面白くて」

射的を後にした私たちはとりあえずふらふらと歩いていた

「別にいいですけど、本気でちよつと泣きそうになりました」

まだちよつと拗ねてるような声でしゃべるハヤテくん

可愛いけどちよつとやりすぎちゃったかな？ 反省

「ハヤテくん」

「なんですむぐつ」

言葉を続けようとしたハヤテくんの唇にうさぎをおしつけた

「な、なんですか？」

「間接キス」

淡々という私を見て、頬がこれでもかかってくらい真っ赤

やめてよ、そういう反応されるとこつちまで恥ずかしくなるじゃない

「ヒナギクさ：「ほら、もうすぐ花火はじまっちゃうじゃない！ それまでに何か食べましょ」

自分の顔を見られたくなくて、顔を隠しながらまっすぐ人の波を突き進む

やばい、今この顔見られたら恥ずかしくて死んじゃう

「あ、ま、待って下さい！ヒナギクさん!!」

トマト顔もだいぶん落ちついて振りむく

「ハヤテくん？」

やばい、はぐれちゃった…

「あ、電話しなきゃ」

持っていた巾着の中からケータイ…ケータイ…

………

ないっ!?

「うそっ」

ど、どうしよう…

この人ごみでケータイなしで落ち合うのは至難の業よね…

迷子センターなんてこの年で行きたくないし、どこか見渡せる場所とか…

ってこの中からそれで見つけられたら忍者か何かよね

「うーん」

ぱしっ

悩んでるといきなり手を掴まれた

「ハヤテく…」

んっ！　と言おうとしたところで止まる

「ねえ、ねえ彼女？　一人？」

二人組の見知らぬ男性

その一人に手を掴まれていた

「いえ、連れがいますので。あと、手を離してください」

事務的に、返す

「いいじゃん。そんな連れなんてほっといて。俺らと遊ぼうよ」

…こういうのってマンガなんかでよくある展開…なのかしら

ナギに借りたマンガにあった気がするわ

「はあ…」

息を吐いて

「すう…しろざく「離して下さい！」

えっ…？

「すみません。その人は僕の彼女なんです。その手を離して下さい」

ハヤテくんが私の後ろから男の人の手をがちりと握ってひきはがす
そのまま抱き寄せられた

「ちっ」

「おい。行こうぜ。彼氏持ちなら仕方ねえよ」

二人組は結構あっさり引き下がってくれた

「ハヤテく…」

顔を上げようとしたらぐいっと手を握られて人の波の中を引つ張られる

「ちよつと、ハヤテくん!？」

彼はこつちも振り返らずにどんどん先へ

怒ってるの？

そう思うと怖くなって声をそれ以上かけられない

人の波をかき分けて、どんどん人気のないところへ

やっと振りむいてくれた彼の表情はいまにも泣きそうな心配そうな顔をしていた

「ヒナギクさん」

「なに？」

「お怪我はありませんよね」

「うん」

「どこか痛いところとかないですか？」

「大丈夫よ」

そういつた直後いきなりハヤテくんが抱きついてきた

「ちよ、ハヤテくん!？」

いきなりのことで思考が追いついてない

ハヤテくんから抱きついてくれるなんて初めて

とくん、とくんとお互いの鼓動が聞こえて

私もギュッと彼の背中に手を回す

何秒、何十秒かわからない鼓動の時計がだんだん小さくなる

先に口を開いたのはハヤテくんだった

「すみません、いきなり。さつき男に絡まれてるあなたを見つけてすごい焦ってて、」

それで…と言葉を紡ごうとした唇を私で塞ぐ

もういいよ。助けに来てくれてありがとう

そんな思いを込めて

見ているのは私と彼と青うさぎ

夜空には大きな大きな光の花が私たちを照らしていた

「きれいでしたね。花火」

「ええ、とつても」

二人でしっかり手をつないで

もう、はぐれないように

「ねえ、来年もいっしょに来てくれる？」

「もちろんですよ！」

帰り道つてすごく切ないけど

寂しくはない

あなたと一緒にだから

「そうだ、今度は海行きませんか？」

「なーに？ 私の水着姿みたいなの？ ハヤテくん」

おどけた調子で私が言うと

「いや、そんなこと…あります」

顔を真っ赤にしたままでうつむくハヤテくん

「素直でよろしい！　じゃあ、新しい水着買いに行かないと！　ハヤテくん。付き合ってくれる？」

「あ、はい…僕でよければ」

「ハヤテくんがいいの！」

笑い合いながら、私の家までもう少し

夏は恋の季節

いっぱい笑って、いっぱい遊んで、いっぱい楽しんで

逆にいっぱい泣いてもいいと思う

今じゃなきや出来ないことだから今やらないともったいない

執事と生徒会長の夏はまだ始まったばかり

ヒナギクと呼びなさい

双剣士

※ この物語は、拙作「伝説の始まり」「暇つぶしの始まり」で記した伏線と、ほんの少しだけ繋がっています。

上流階級子弟の通う超名門校として名高い白皇学院。

次代の日本を背負う超エリートたちが集うその学び舎は、校舎や内装のみならず立地も広さも超一流。通う生徒たちは文武両道、質実剛健を旨として費用に糸目をつけぬ帝王教育を施され、その出身というだけで社交界から一目をおかれるほど。

そんな白皇学院のもっとも高い場所は、通称ガーデンゲートと呼ばれる時計塔。そしてその最上階にあるのは、超エリートたちの中でも選りすぐられた才子才媛にのみ入室の許される生徒会室。そこ

の主たる生徒会長ともなれば、まさしく現人神と呼ばれるにふさわしい能力と風格と威厳を兼ね備えた存在と言えよう。

そして今、若干十五歳の身にして至高の地位へと登りつめた一人の女生徒がいる。栄光ある白皇学院の歴史においても二人しかいない高校一年での会長職、しかも知性・美貌・支持率そして戦闘力の方において当代最強をうたわれた無敵の生徒会長である。

しかし、その実態は……。

「……理不尽だわ」

冬休みが明けたばかりの一月下旬、早朝の生徒会室。山のように積み上がった書類の整理と署名をしながら、無敵の生徒会長・桂ヒナギクは一人虚しく愚痴をこぼしていた。

がらんと寒々しい生徒会室には彼女のほかに誰もいない。早朝ランニングと剣道部の一人朝練をこなした彼女が前日までに処理しきれなかった執務を授業前にこなしているのに対し、他の生徒会役員は誰一人として手伝いに来ようとしないのである。彼女の名誉のために述べておくが桂ヒナギクは権限を手放さない独裁者では決してない……仕事を割り振ろうとする前に役員の半分は逃げ出してしまうし、残りの二人もバイトだ所用だといって気がつくと思わなくなってしまうのである。書類の裁可が終わっ

た頃には、まるで見計らっていたかのように元気に戻ってくるくせに。

「(ばきつ) ……ん、もうっ！」

砕けたボールペンを取り替えながら署名を続けるヒナギク。名門だエリートだと世間から言われていても実態はこんなものだった。父兄がそのまま学園理事を兼ねるようなお金持ちの子弟が、小中高一貫校というぬるま湯に浸かったまま同質性の高い環境で暮らせばどうなるか。努力や向上心とはまるで無縁な世間知らず、コネと要領の使い方に長けた“お公家さま”が大多数を占めるようになる、その点は世間のお坊ちやま校・お嬢さま校と大差はない。白皇学院が突出した存在に見られているのは教育体制のせいではなく、時折現れる天才や秀才を飛び級や特待生と言った目立つ形で処遇しているからに過ぎないのである。

それでも、肩書きだけとはいえ名門校を名乗っている以上、政財界や姉妹校からの視察や交流依頼は毎日のように舞い込む。やる気はないくせに文句の声だけは大きい学内からの要望も数限りなく積み上がってゆく。そればかりか今期になって急に学内行事に口出しをするようになった理事長代理からの横槍までヒナギクの肩にのし掛かるようになって来た。泣き言の嫌いな彼女でも、愚痴の一つくらいはこぼしたくなるというもの。

「誰も彼も、私をなんだと思ってるのよ……おだてれば済むと思ってるんじゃないでしょうね」

そもそも、なりたくてなった会長職ではなかった。愛歌と美希たちにハメられて生徒会長へと祭り

上げられ、気がつくとき学内外の厄介ごと全てを押しつけられる日々。生徒たちから羨望の目で見られる時計塔の頂上も、高所恐怖症のヒナギクにとっては天空の牢獄に等しい。せめて仲のいい友達と一緒にやれるならと思っていたらこの体たらくだし……。

花の乙女の青春が、こんなことの繰り返しでいいのだろうか。友人も姉も自堕落でお気楽な生活を満喫する中、自分だけが何でこんな損な役回りを務めなきゃならないのか。頼りにされるのは悪い気はしないけれど、せめて一人、一人だけでもいいから、自分に手を貸してくれる人はいないものだろうか……。

「(ばきつ) ああん、もうもうっ！ 最近のボールペンは安物ねっ!!」

本日九本目のボールペンを握りつぶしながら、それでも生真面目なヒナギクは一人で執務を続けるのだった。のちに「握力オバケ」と称される女性離れた拳の筋力は、こうして当人すら知らぬうちに熟成されていくのである……。

「ねえ、あの子……」

「あんな、巢から落ちちゃってるね。まだ飛べないから戻れないみたいね」

「あのままじゃ、猫とか熊とかタヌキとかが来たら食べられちゃうよね」

午前の授業中。優等生らしく黒板を注視していたヒナギクの耳に、窓の外を見ていたクラスメートのひそひそ声が飛び込んできた。幼少時の喫茶店での経験もあり、授業に関係ない雑談は聞き流すことにしていたヒナギクだったが……とあるキーワードが不意に激しく彼女の鼓膜を打った。

「お父さんやお母さん、いないのかなあ？ 早くあの子を助けてあげないと」

「無理じゃない？ ヒナをつけて木の上まで飛べるほど大きな鳥じゃなさそうだし……これも自然の厳しさだよ。誰か、親切なスーパーヒーローでも現れない限りは」

「すみません、鳥の仔を拾いに行つてきます!!」

子供を助けない鳥の両親にも、それを見ているがら助けようとしなくクラスメートたちにも腹が立つ。窓の外を一瞥したヒナギクは急に立ち上がると、堂々と理由を述べてから無い胸を張って授業中の教室を後にしたのだった。教師や生徒たちはボカンとしながら彼女を見送った……小学生ならいざ知らず名門校の女子高生が告げるにはワイルドすぎる離席理由を、瞬時には理解しかねた故に。

……そして。

「……しまったわ、どうしよう……」

巢から落ちた鳥の仔（チャー坊と名付けた）を拾い上げて木の上の巢に戻してあげたのはいいもの

の、気がつくと自分まで木の上に登ってしまった桂ヒナギクは途方に暮れていた。高所恐怖症のヒナギクにとっては、下までの距離が三メートルだろうが三百メートルだろうが同じことである。飛び降りるなんて論外、かといって下を見ないまま木の幹をゆっくり降りる自信などない。助けを呼ぶにも今は授業中だし……。

「ええ、落ち着くのはヒナギク。どの道このままじゃ居られないんだから、どうにかして降りるしかないの。やるの、やれるわ、やるしかないのよ……」

理性と知性はそう言っている。しかし肉体だけは完全に彼女を裏切っていた。距離を測ろうにも目がくらむ。姿勢を変えようにも脚が震える。飛び降りたり滑り降りている最中にバランスを崩し、脳天杭打ちパイルドライバーを食らってしまう自分の未来図が鮮明に脳裏に浮かび上がってしまった。一度そうなってしまっただけで能力も物理法則も関係ない、思い描いたとおりの未来になるしかないのだ。これまでに良くも悪くも、自分はずっとそうしてきたのだから！

《ああ、もうダメ、助けて誰か……》

彼女らしくもない弱音が頭の片隅に浮かんた、ちょうどそのとき。

「……というか、そもそも逃げ回る必要なんかないですよ……堂々としていればいいんです、堂々

と！ だって僕は三千院家の執事なんですから！！」

ふと木の下から、耳慣れない少年の声がヒナギクの耳に飛び込んできた。三千院家の執事、という単語に凍りつきかけた脳細胞が素早く反応する。たしかあの気難し屋のナギが、嬉しそうに話していた名前。車で跳ねてもトラと戦ってもヤクザに囲まれても死なないと言う、ガン〇ムの生まれ変わりと呼ばれる新任の執事……。

《こ、これは天の助けなのかも！》

だがここで情けなく救いを求めたのでは白皇学院の威厳に関わる。相手は部外者で、自分は生徒會長なのだ。ヒナギクは内心の嬉しさを押し隠して、せいぜい冷静かつ余裕のある口調を装いながら木の下に少年に声をかけた。

「まったく……三千院家の執事君が……こんなところで何をしているのかしら？」

ところが。ヒナギクが声色に込めたはずの威厳の薄皮は、少年執事が顔を上げた途端に木っ端微塵に弾け飛んだ。

「えっと……あなたこそ、そんな所で何を……？」

「さ……さすがは三千院家の執事。いきなり核心を突いてくるわね」

木の枝に登って見下ろしている女子高生。確かにあまり格好のいい構図ではない。

「こ……これは要するに……えーと、えーと……木って意外と滑りにくいし枝もあるからスルスル登れちゃうんだけど、上ばかり見ていると下がおろそかになるといいうか……」

「平たく言うと、猫が高いところに登ったはいいけど怖くなって下りられなくなったみたいもんですね」

「ひ!! 平たく言わないでよ!! なんか私、バカみたいじゃない!!」

どうも調子が狂う。核心的なことは何も話していかないはずなのに、いつのまにか自分が劣勢に追いやられる。交渉術も何もあったものではなかった。普段のヒナギクであれば考えられない屈辱であった。

これはあれだ、自分が弱みを抱えているからに違いない。さっさと対等の場所に立たないと……こんなときにまで負けず嫌いの血をたぎらせたヒナギクは不利な会話を早々に打ち切って本題に入った。「と……とここであなた、最近ナギの所に来た噂の執事君よね? ものすごく丈夫でガン〇ムの生まれ変わり噂の……」

「ガ……えーと、まあ噂がどうかは知りませんが……」

「ならその……ちよっとお願ひがあるので……」

「はい? え、なんででしょうか?」

「だからその……えっと……う……受け止めてね」

「え？」

「ダメじゃない。ちゃんと受け止めないと危ないわよ」

「危ないと思うなら最初から飛ばないでください!!」

「ム……ご……ごめんさい。でもそんな怒鳴らなくなつて……すごく怖くて、一秒でも早く下に降りたかつたんだもん……」

大地に降り立つた桂ヒナギクはなけなしの威厳をかき集めようとしたのだが、飛び降りる過程を目の当たりにした少年執事からのツツコミを受けて瞬時に劣勢に引き戻される。受け止めてと言った手前「私の降りるところに居る方が悪いんでしょ」とは言えない立場のヒナギクは、とりあえず素直に謝ることにした。

「ま……まあいいですけど、でもはしたないですよ？ 女の子がスカートであんな高いところ登つて……」

嵩に掛かってお説教を始める少年執事。手の掛かる子供扱いされてると感じたヒナギクは瞬時にカチンときた。いかん、このままでは私、負けっぱなしだわ!! 何に負けたのかは知らないけど、この

まま負けていいわけではないのよ!!

「別に平気よ? 下、スパッツだし」

「————!! な、な、何考えてるんですか!! お、女の子はもう少し恥じらいつてものを……!!」

「え〜? 何その純情ぶり。もしかして三千院家の執事は、情緒が小学生並みなんですか〜」

ようやく訪れた反撃のチャンス。桂ヒナギクは鼻高々に赤面する少年執事を見下ろしたのだが、同時にちよっぴり申し訳なさを感じる余裕も出来ていた。高所の恐怖と恥ずかしさが脳裏から消え、くだらない勝ち負け意識もようやく解きほぐせた今、自分はやんとお礼を言わなきゃいけないんじゃないかしら……そんなことを考えた刹那。

「だいたい高所恐怖症ならそう言ってください。別にいきなり飛ばなくても……言ってくれば助けに行きますよ」

……………きゅんっ!!

「……………!! へ〜、そう……言ってくれば、助けに来てくれるんだ……」

心臓の鼓動が瞬時にトップギアに切り替わる。思わず顔を背けたヒナギクは内心の動揺を押し隠しながら、少年執事の言葉をオウムのように繰り返した。これまで助けてと頼られたことはあっても、助けてくれると言ってくれた人は居なかった。敬愛する姉が自堕落な性格をむき出しにした今、自分は常に助ける側の人間でないといけないんだと思ってた……そんな心の透き間に冷たい楔を打ち込まれ

た気分。

まったくもう……な、ナマイキ言ってくれるじゃないの!!

「でも、どうして高いところが苦手なのにあんなところに？」

「ん？　しょうがないじゃない、あの子だったら……巢から落ちて泣いてたんですもの」

そんなヒナギクの内心を知ってか知らずか、この状況に至った原因へと話題を転換する少年執事。

ここに至っては誤魔化す意味もないので、ヒナギクはありのままを素直に説明した。だがそんな二人の前に、小さなピンチが訪れる。

「わ———!!　バカバカ!!　なんなのよ、あのカラス!!」

「ピンチですよ!!　いま、ちいさな命が風前の灯火ですよ!!」

木から落ちたのを助けて巢に戻した小鳥のヒナの前に、獰猛そうなカラスがとまってニラミを利かせている。ヒナを助けようと戻ってきた小鳥の両親もカラスの眼光一つで追い払われる始末。すでに地上に降りてしまったヒナギクにはどうすることも出来ない。

「だ……ダメよ、ダメよそんなの!!　お父さんやお母さんが子供を見捨てるようなことをしちゃ!!

そんなのは……そんなのは絶対……ダメなんだから……」

目から涙がこぼれるのも構わずにヒナギクは叫び続ける。実の両親に子供のころ捨てられたときの記憶、すぐ目の前で凶行が行われようとしているのに助けられない無力感……悲しくて辛くて悔しくて、感情ばかりがほとぼしるのに身体は前に動かない。危機に際しても泣きわめくだけの「弱い女」に自分がなってしまうことに、このときのヒナギクは気づいていなかった。

だが救いの手は、またしても初対面の少年から差し伸べられる。

「どいてください」

「え!!」

ゴオツ!!

「カラスさん。その辺で引いてもらえませんか？ でないと次は……当てなければいけないので」種族の壁を越えた露骨な恫喝。逆らったら殺される……そうカラスに悟らせるには十分な剛速球とそれを放った少年の不気味な笑顔だった。震えながらその場を去ってゆくカラスを見送って、ほっと安堵の息をついたヒナギクであったが……少年に笑顔で話しかけられると、つい負けず嫌いの感情が表にでてしまうのが彼女の性。

「よかったですね、ヒナが無事で」

「ていうか私には投げるなって言っておいて……自分は投げちゃうんだ」

「僕はコントロールがいいので」

「なに？ それはどういう事よ!! まるで私がノーコンみたいじゃない!!」

不毛な言い争いであることはヒナギク自身が自覚していた。自分がするべきことは口喧嘩ではなくお礼を言うこと。この少年は自分をバカにするために投げさせなかったわけではないし、そもそもヒナの危機を目の前にして泣き叫ぶことしかできなかった自分には文句を言う資格などない……そんなことくらいは分かっているのだ。

なのにどうしてこう、この少年は自分の弱いところばかり突いてくるのだろう。どうして自分はこの少年の前だと、虚勢がごとごとく崩れてしまうのだろう。そしてそのくせ、問題はすべて彼の手で解決されてゆく……木から降りる件にしてもチャーター坊を守る件にしても。

「いったい……この人は、いったい何者なの？」

「ハヤテです」

「……へ？」

「綾崎ハヤテです。あなたは？」

心のつぶやきを読まれたわけでもなかるうに、あっさりと名乗ってみせる少年執事。機先を制せられた桂ヒナギクは、思わず息を呑んで口ごもってしまった。

「……わ……私は……」

「うわ——！！ すごい景色ですね——！！」

「ふ……どう？ 素晴らしいでしょ？ この時計塔からの眺めはまさに絶景……あまりの美しさに瞬きすら忘れてしまいそうになるでしょ？」

ここは時計塔最上階の生徒会室。お礼ついでに時計塔からの景色を見せてあげる、と少年執事を自分のホームグラウンドに連れ込んだ桂ヒナギクは、ようやく会長らしい偉ぶった言葉をかける余裕を取り戻していた。お礼というのはあくまで建前。さつきから格好悪いところばかり見られている少年に対して、ひとつくらい良いところを見せてあげないと生徒会長の沽券に関わる。そうよ、あのまま白皇の会長はバカだと思われるわけには行かないんだから……そんな子供っぽい対抗心を押し隠した初対面の少年への大サービス。しかし……。

「そんな奥からでは見えませんよ？」

「私はいいの。心の目で見てるから」

「……でもここからだ、構内の様子がよく見えますね」

「でしょ？ ここに生徒会室があるのは、生徒の様子をしっかりと見つめるためなんだから」

「桂さんはここから見たことあるんですか？」

「私はいいの。目ではなく心の声を聞くことにしてるから」

さつきから情けない言い訳ばかりしている気がする。なんでこの人の前だともうなっちゃうんだろ
う、これじゃ何の自慢にもならないじゃない……そんな負けず嫌いの気持ちが再び鎌首をもたげた、
ちようどそのとき。

「でも……本当に……学校、楽しそうだな……」

背中越しに聞こえてきた少年のつぶやきにヒナギクはハツとなった。あなたは学校に行っていない
の、という無遠慮な質問を喉の奥にのみ込む。そう言えばこの人、三千院家の執事だって言ってたっ
け。つい詰まらない意地を張ってしまったけど、この人はこの学校に通う訳じゃないんだ……ここで
別れたら、次にいつ会えるか分からない人なんだ。

ちくん。

胸の奥にかすかに刺さる鈍痛。ヒナギクはそれを彼女らしい解釈で受け止めた。その真偽をまった
く疑うことなく。

《だったら、この借りをいつ返せばいいわけ？ こんな情けないところばかり見られたままでお別れ
しろと言うの？ ありえないわ、どうにかしてこの人に、頼れる生徒会長としての格好いい私を見せ
つけてあげなくちゃ!! そう簡単にバイバイするわけには行かないわよね!!》

「でも今、授業中みたいですけど……いいんですか？ 桂さんは出なくて」

「……………」

「桂さん？」

「……あーもお、うるさいうるさい、だまれ——!!」

そして。最後まで反撃の機会を得られないまま、彼女と彼に別れの時がやってくる。

「さて……そろそろお嬢さまに、お弁当を届けに行きますかね。でもありがとございます桂さん。桂さんのおかげで一生活れられない景色を見ることが出来ました」

冗談じゃないわ、これつきりにされてたまるもんですか……内心の複雑なさざ波を憤怒の気持ちで覆い隠して、桂ヒナギクはエレベーターに向かおうとする少年執事をにらみつけた。

「あら？ もう二度と生徒会室には来ないみたいな言い方ね」

「はは……そりやもう来れないでしょ？」

「どうかしら？ そのうち……マメにここに入入りするようになるかもよ？」

予感ではなく予測と願望を込めて、桂ヒナギクは少年執事の瞳を見上げた。ナギの執事だというなら白皇との縁が完全に切れる訳じゃない。生徒会どころか授業にすらまともに出てこないあの子だけ

れど……それでも可能性はゼロじゃない。ていうかゼロじゃないようにしてみせる。この桂ヒナギクをここまでコケにして、勝ち逃げしようなんて許さないんだから!!

「またまた……桂さんったら……」

「ヒナギクと呼びなさい」

「へ？」

そして可能性がわずかでもある以上、学院に来る機会があったときに自分のことを素通りさせるわけには行かない。ヒナギクは少年の心に自分の存在をマーキングするように、大胆に一步を踏み出した。

「同じ名前で私より目立つ人がいるから、みんな下の名前で呼ぶの。だから私のことはヒナギクって呼びなさい」

大嘘がすらすら出てくる。女子ならまだしも、男子生徒に名前呼びを強要するのはこれが初めてだった。だがそのタブーを破るのに、この少年ほどふさわしい存在はいないと思った。なにせ無敵の生徒会長たる私を一敗地にまみれさせ、再戦を心に誓わせたのは彼が初めてなのだから。

「いいわね？ 綾崎……ハヤテ君」

そしてヒナギクはにっこりと笑って、出会って間もない少年執事に宣戦布告を叩きつけたのだった。

このときの彼への執着が対抗心ではなく恋心であることに気づくまでに、桂ヒナギクはその後二ヶ月弱を要することになる。

そしてその間に……『ヒナギクさんには迷惑の掛け通しで、顔を合わせると怒られてばかりですよ』と想い人に思いこませるだけの不名誉な実績を、彼女はガーデンゲートよりも高々と積み上げてしまうことになるのであった。

F i n .

まんまるまるまる

ピーすけ

今夜の月は綺麗ですね。

かの文豪、夏目漱石が「I love you」に対する訳として用いた言葉だという。

もっともそれは所詮逸話であり、逸話は逸話でしかないのだけれど、ことさらに最近の私はその感性に、ひどく——ちよつとド突いてやりたいほどに——感嘆しているのであった。

白皇学院生徒会室——学院内でもっとも空に近い位置に設けられた部屋——その部屋の長が座る椅子に腰かけ、机に頬杖を突きながら、私は真ん丸お月様を見ていた……いやもとい、睨め付けていた。ランドルト環(円形の一点が欠けたアルファベットのCみたいなのことだ)で計測できる最大値、両目視力2.0以上を誇る私の両目(自慢じゃないけれど、規定位置の倍の距離からでも余裕でランドル

ト環を判別できる)は、今日も景色を鮮明に見せてくれている。眩いほどに鮮烈で、大粒の真珠を連想させるほどに真円を描く月。目を凝らせばお持ち餅をついているうさぎ達の表情まで見えそうで……だからきつと、十人が十人、声を揃えて美しいと答える程に美しい月だ。

だけど、生憎私は十一人目のようで、その美しさに、どうにも釈然としないわざとらしさを感じてしまつて好きになれない。ほら、月のうさぎなんて所詮はクレーターの形なんだ。だからくだらない浪漫に浸る暇があるのなら、机の上から天井近くまでうぞ高く聳え立っている書類の山を片付けてしまわなければならぬのである。しかし、どうにも遅々として進まない。

「やーめたっ」

苛立たしさがむくむくと膨れ上がってきて、私はついに匙を投げた。いや、正しくは投げたのはボールペンなのだけど、まあそれはどうでもいい。

ころころと机の上を転がったボールペンは、勢い余つて机の下に落下。からんからんと音を立てて私はここに居ますよと懸命にメーデーを送ってくれた。しかしそれをただ一人聞き届けた私はというとう、いまさら拾う気にもなれなかつたので無視を決め込むことにしていた。全く、怠惰で薄情かつ最低な人間である。

誰が完全無欠、完璧超人か。おへそでお茶が湧きそう。ぶくぶく。

一体、私はいつの間にこんな人間になつてしまったのかしら。

昔の私はもつと純粹で、ストイックだった。なるほど、あの私ならば、そうそうたる肩書を背負っていてもさぞ似合っていたことであろう。

なのに、今の私ときたら、なんだかとてもあやふやで、ふわふわしていらいらして、かといつて詩的に表現するにはちよつと稚拙で……。

うん、要するに自分でもちよつと訳がわからないわ。

なんで、どうして？

いや、敢えて考えてみるまでもなく、わかっている。月を好きになれないのは、好きになってしまったからなのだ。

この世で最も美しい夜空を、月を、知ってしまったからこそ、純然たる自然の美に感動できなくなってしまっている。

本当は、心のどこかでは、今日の月があの日より美しいと気づいている。

そしてだからこそ、私はそれを認めるわけにはいかない。自分にとっての特別が、万人にとっての特別より価値のあるものであつてほしいから、いつまでも子供みたいに意固地になつてしまっているのだ。

ああ、苛立たしい。

「もう、なんで……」

澄んだ夜空に浮かぶ真ん丸お月様が、やたら遠くに感じられて私は気が付けば立ち上がっていた。も

しかししたら、あそこならまた綺麗な月を見ることが出来ないと、そう思っていた。

ふらふらと、吸い寄せられるようにバルコニーへと進み、けれど途中で歩みは止まってしまふ。

私がある場に足を縫い付けられたのは、それが無駄な足掻きだと悟ったからである。憂鬱の理由は明白なので、いくらそれを疑的に再現したところで虚しさだけが残るのは火を見るより明らかだからである。断じて、高いところが苦手だからやっぱりやめた。なんてへっぴこ極まりない理由ではない。

無いんだからねっ!!

「私がこんなだからかなあ」

誰も見ていないのに心の中で意地を張ってしまっている自分が嫌になる。

負けず嫌いは私のアイデンティティだと自負しているし、それが長所となるように努力を怠らないよう努めてきたつもりではあるのだけれど、なまじっかそれを実現してきただけに容易には自分を変えることが出来なくなってしまっている。まさか、自分の性格にこうも足を引張られる羽目になるとは十余年を生きてきて、これまで夢想だにしなかった。

もうこれは、私にかけられた呪いなのだ、諦めてしまふより他にない……いや、諦めるなんて私らしくない。私は今まで妥協せずにまい進してきたではないか。今更甘えるなんて許せない……って、やっぱりこれ負けず嫌いじゃないの!!

がしがしと頭を掻き筆る。

——重い足を引きずって、左足を前へ。

どうせ負けず嫌いななら、出来ることはやってしまおう。やってする後悔より、やらない後悔のほうが何倍も辛い。

——続いて右足をノロノロと前へ。

歩行という動作がこの上なく難解なものに思えてくる。

普段どうやって行っているのか、頭の中で整理する。

——さらに左足。

歩行の基本は体重移動だ。足を動かすつもりではなく、体を前に倒すつもりで、足はそれを支えるための杖だ。

——二度目の右足。

ひどく疲れている。考えれば考える程に答えがゲシュタルト崩壊を起こして。何が正しかったのか、自信が持てなくなってくる。

——次の足は、出なかった。

ぐんと空が近くなっていて、次の瞬間には体が宙に浮く妄想が暴走を始める。

妄想はいつのまにか現実になっていて、私の体はふわりと浮遊し……内臓が無重力によってふわりとせり上がり、近かった空が瞬く間に遠くなって、月に向かって助けを求めるように伸ばした腕は虚空

だけを掴む。

落下。万有引力は情け容赦なく私を地面へ向けて引つ張り、言いようもない絶望だけが心の中でぐるぐると螺旋を描く。

怖い。怖い。怖い!! 恐怖が恐怖を助長し、私は進むことも逃げることも出来ずに固まってしまふ。もう、体裁を気にもしていられなかった。見つともなく息を切らし、涙と鼻水で顔をぐしゃぐしゃにして。それをぬぐうことも出来ず。からからに乾いた喉では助ける声さえも小さく掠れ、そして――

「ヒナギクさん？」

私の体は使い慣れた机の上に無事着陸していた。

けれど、余りにも夢の名残が鮮明に残っていて、ぼんやりとした現実の方がひよっとしたら幻なので、はという不安に駆られる。頼りなさに手を伸ばし、近くにある人っぽい陰を掴む。

雲のように頼りない輪郭なのに、その人影は確かな感触を返してくれて……暖かくて……私はそれだけでとてつもなく安堵した。

「……あのう」

けれど、それも束の間の事。

「……ん？」

視界の霞が、少しずつ晴れていく。

世界が鮮明になると、そこにはぼんやりとした男の子が困ったような表情で立っている。

見れば私の指が、男の子の着ている服の袖に、がっしりと破れんばかりに食い込んでいないか。

「……？……!!」

よし、落ち着いて状況把握——理解。

うん、今日も私の明晰な頭脳は一切の遅滞なく結論を

「わ、え!? ええっ!?!」

出してくれたけど、そこからさきどうしていいかは教えてくれなかった。

顔が熱くて、今すぐ逃げ出したかったけれど、逃げるという選択肢は私にはあり得ないわけで。オーバ

ーヒートしたまま、ただ私らしくしようと思地を張ることしかできなかった。

「ハ、ひやヤタくんじゃない。どうしたの？」

慌てて手を放して、胸を反り返らせて言い放った。声が裏返っていた。

口元を涎がつたう感触。そっとポケットからハンカチを取り出して、何事も無かったかのようにぬぐう。

「……あの……えと」

「ど・う・し・た・の？」

もう、最後まで押し通すしかない。

「いや、こんな時間なのに生徒会室の灯りが点いていたので」

「ふうん」

心配してくれたのだと知って嬉しくなったけれど、ニヤけるのは我慢我慢。我慢なのです。……頼っぺたがひくひくと痙攣している気がするけど、きつと我慢できている。出来ているはず。うん。タイジョウブ。タブン。

「……ご、ごめんなさい」

何を勘違いしたのか謝る彼。ああ、また私はやってしまったのか。

「別に怒ってないわよ」

「いや、ですけれど……」

「怒ってないってば!!」

「は、はいっ」

一番苛立たしいのは私自身なのに。自分の未熟さにちよっぴり泣きたくなった。

目をそらして、時計を見た。今日もあと二時間。なるほど、心配されるのも無理からぬ時間だ(というか、私の身を案じている彼こそ、こんな時間までいったい何をしていたのだろう。よく見れば服もボロ

ボロだし……いつもの事と言えばいつもの事なのだけど、むしろ心配すべきは彼自身な気がするの私だけではないはずだ」

「こんな時間かあ……もう、今日はここまでかなあ」

机の上には相も変わらず、殺人的な高さまで積みあがった書類の山。夢の中ではこの半分くらいだった気がするのに、現実は無常なのだ。今更やる気も起きず、私はそっとペンを置いた。

ええ。と首肯しながら、彼が笑った。

「無理しても効率が落ちるだけですからねえ」

一言言われたくない人に無理するなって言われた気がするわ。

「こんばんのおかずには、ハンバーグをつくりますから、早く帰って、一緒に食べましょう」

む、微妙にお子様扱いされたのかしら？ まあ、確かにハンバーグとオムライスが好きですけど？ 何か悪いかしら？

きみは私を子ども扱いするけどね。言うなら大好物のそれらよりずっと、私は――

「うん、そうね……でも」

「……でも？」

私はすつくと立ち上がり、窓の外を指差した。

「ちよつとくらい、ここで月を見ていかない？」

そこにあるのはまんまるまるまるお月様。

ウザったいくらいに輝いていたお月様。

「ほら、今夜のお月さまは、とっても綺麗……」

ごくんと唾を嚙下。ドキドキしているのは、きつと高所という苦手な分野に挑戦しているからなのだと自分に言い聞かせた。負けるな。私。

「だから、もっと近くで見たいの」

最後まで言えたならきつと、今日の月は人生で二番目に綺麗な月になるのだろう。

私はぎこちない笑顔を作って、やつとの思いで次の言葉を紡ぐ。

「また、手伝ってくれるわよね？」

意地を以てして照れを心の底に押し込め、私はそつと彼に掌を差し出したのだった。

了

カレーの天使

ロッキー・ラックーン

「はあゝあ…」

のっけから盛大に溜め息をつくのは、私こと桂ヒナギク。というのも、ここ数日で私の生活は大きく変わってしまったからだ。とある国のお姫様のお守りとしてアパートに一人暮らし（正確には押入れに居候がいる、のび●君のような状態）になった。そこまではまあ百歩譲って別段問題は無いとは言える。かなり無理はあるけど。

何より私にとって大問題だったのは、そのアパートの別部屋には私の想い人——綾崎ハヤテが暮らしているという事だった。これまでの私のアマノジャクっぷりを知っている読者様がたなら、この私の気持ちも分かって頂けると…多分思う。

今日も今日とて、私は自分の想い人のはずの彼に素直に接する事が出来ずに勝手に落ち込んでしまっ

のだった。

「ヒナギクさん」

不意に押入れからかけられる声の主は、先に話した私の部屋の居候——アリスだった。初めて彼女を見た時、強い既視感を覚えたのは私だけではないと思っただけど、この事についてはまた別のお話で。アリスは神妙な面持ちを崩さずに話を続ける。

「私と一緒に暮らしてくれて、ありがとうございます」

「ん？ どうしたの、今になって…」

「いえ、ただなんとなく。今さらですが貴女にお礼をしたいと思ひまして…。何かありませんか？」

たった数日しか一緒に暮らしていないけど、アリスについて分かった事が一つある。その幼くてかわいらしい見た目からは想像出来ないほどの矜持を胸に秘めているという事だ。その言葉の端々に、王族としてなのか彼女の生来のものなのかは分からないけど…何か気品に満ち溢れたものが感じられる。

「なに言ってるのよ。困ってる人を助けるのは当たり前でしよう。それも貴女みたいな子供が…気持ちだけ貰っておくわ」

「そうですか…貴女は立派な人なんですわ」

「そんなことないわよ？ 普通よ、ふ・っ・う♪」

幼いながらもその心がけはとて立派なものだとは思うけど、それはそれ、これはこれ。私にだって譲れない所がある。こうやって、相手のプライドを尊重出来るのもアリスのすごい所だと感じた。

「では、普通ついでにお願いしたいのですが…」

「なにかしら？」

「今日のお夕飯はカレーが食べたいですわ」

急なリクエスト。確かに今日は、いつもご飯を作ってくれるマリアさんがナギと出かけていて、ハル子はイベントに参加といった形で、私がハヤテ君とアリスの分も夕食を作る事になっていた。正直言う、何にしようか迷っていた所だったので都合だった。

「カレー？ 良いわよ、作ってあげる。私もカレー大好き」

「ありがとう、ではお願いしますわね」

カレーを作るとなると…ルーも野菜も冷蔵庫には無かったはず。スーパーへお買い物に行く必要が出てくるわね。

「うん。じゃあ、買い物に行つて来るわ。…一緒に行く？」

「ええ、もちろんですわ。あと、荷物持ちも必要ですわね」

「荷物持ち？」

私の言葉にアリスはニヤリと笑みを浮かべて、パンパンと手を叩いた。

「…ハヤテ！ いらっしやい!!」

「えええっ!!」

「はーい、アータン。呼んだ？」

アリスの大声から約5秒で登場したハヤテ君。まるで呼ばれる事を知っていたかのような早さだった。

「遅いですわよ。今からスーパーに買い物に行くので、仕度なさい。荷物持ちは任せましたわね」

「うん、じゃあすぐに準備してくるね！」

「その暑苦しい執事服も着替えてきなさいな」

「わかったよ、アーたん。じゃあ、玄関で待っててね！」

ほんの十数秒のやり取りで、私の買い物にハヤテ君が同行する事が決定。多分、私が一緒に行って貰う様に頼むとなれば、そこまでで十分以上はかかるんじゃないかと思う。悔しいけど。

「ちょっと、アリス！」

「ん、なんですかヒナギクさん？」

「なんでハヤテ君も一緒なのよ!？」

「嬉しいでしょう？」

「そんな事…無くもないけど…」

アリスには、私の動揺とその奥にある心の高鳴りを見透かされているようだった。話せば話すほどに、私が彼女に対して後手になってしまいう絵柄が脳内に浮かんできた。

「私の目には、ヒナギクさんがハヤテともっと仲良くなりたいのに素直になれず困ってるように見えましたので。困ってる人を助けるのは当たり前前なんでしょう？」

「そ、そう……。じゃあお言葉に甘えさせてもらうわね」

「うふふ、アリスにお任せですわ♪」

彼女が私にそうしたように、私も彼女の心意気を汲んで甘えさせて貰うのだった。ハヤテ君と買い物だなんて……そういえばいつだったか二人きりで行った事もあったわね……。



「アーたんは夕ご飯、何か食べたいものある？」

「今日のお夕飯はヒナギクさんがカレーを作ってくれますわ。ハヤテも楽しみにすると良いですわよ」

「え!? 本当ですか、ヒナギクさん？」

「ええ、今日のご飯は任せといてね！」

「ハイ！ ヒナギクさんのカレーかあ…楽しみだなあ」

広めの歩道を三人で手を繋いで歩くスーパーまでの道のり。ハヤテ君との会話が途切れる事は無かった。ハヤテ君が気を遣ってくれているのか、アリスが意図的に会話の流れを作ってくれているのか最初は勘繰っていたけど、この二人との居心地の良さに、私は次第にそんなつまらない事を考えなくなっていた。

「じゃあ、ハヤテ君はお野菜をお願い。カレーと一緒にサラダも作るから、その分も頼むわね」

「わかりました。となると、ヒナギクさんはお肉とルーですか？」

「うん。アリスの好みに合わせて作るから、じっくり見てくるわね」

「かしこまりました！」

いったんハヤテ君とは別れてカレーに集中。カレーは私も大好きで、せっかく作るのなら美味しいのを作りたい。

「お肉は何がいい？」

「鶏肉ですわね。美味しいカレーを作るにはチキンと相場が決まっています」

「なるほどね…。じゃあ、次はカレールー…」

と、箱入りのカレールーが所狭しと並んでいるコーナーに向かいかけた私を、服の裾を引っ張ってアリスが制止した。

「お待ちなさい。たまには自分でスパイスを調合するというのは…どうでしょう？ 自分で作ったスパイスは美味しさも格別ですわよ」

「へえ、確かにそれは面白そうね。…あ、でも私スパイスの事って知らないわよ？」

「ご心配には及びません。私の特製レシピのメモがここに…はい、これを揃えてもらなさい」

「用意が良いわね。じゃあ、スパイスコーナーに行きましょうか」

「れっつごーですわ！ すべてーは愛のたーめるういっく♪」

カレー好きを名乗る身として、スパイスの調合には正直なところ興味があった。市販のカレールーは手軽で美味しいけど、今一步カレーの奥深さに足を踏み入れていないような気がしていたのも事実。

こだわりの強いアリスとの食事は良いきっかけになるんじゃないかと思った。
愉快的ワルツ調のアリスの歌声は美味しいカレーを予感させるに十分なものだった。

「コリアンダー、カルダモン、シナモン、チリパウダー……たくさんあって良く分からないわね」

「とりあえずは私のレシピ通りに買えば間違いありません。あとは帰って自分の舌で確かめてみるのですわ。料理の味を最後に決めるのは愛情です。貴女なら出来ますわよ」

「分かった。やってみるわ」

すべては愛のターメリック。とても味わい深くて良い言葉だと思う。初めてだけど張り切ってやってみようかしら！

「ほらほら、野菜が、食べたくなるー♪ あ、ヒナギクさんにアーたん、お待たせしました！」

「あ、ハヤテ君。……わあ、お野菜たくさんね！」

「ハイ。生で食べてよし、調理してもよし、カレーの美味しさも引き立たせてくれる野菜は素晴らしいんですよ。さあ、お二人もレッツお野菜！」

おかしな歌と小踊りと共に私達の前に現れたハヤテ君。イメチエン……ってやつなのかしら？　ちよつと気持ち悪いわね。（褒めてるつもり）

「う、うん……れつ……」

「いきなり気持ち悪いですわね。さあ、ヒナのカゴのものと一緒にしてさっさと会計を済ませて来なさい」

恥をしのんでノリに合わせようとした私もろともぶつた切るアリス。彼女のこういう所もお姫様気質な性格が成せるものなんだと思う。



午後四時、アパートに到着。ちよつと凝ったお料理を始めるには良い時間だった。

「じゃあ、頑張って作るから楽しみにしててね」

「ヒナギクさん、僕もお手伝いします！」

「え…じゃあ、お願いしようかしら」

「では、私はお夕飯が出来るまでお昼寝してますわ」

「そう。出来たら起こしに行くからね」

ハヤテ君の言葉と同時にアリスからの視線を感じたので、余計な事を口走らずにお願いが出来たと
思う。

「ヒナギクさん…チャンスですわよ」

「うん、ありがとうアリス」

ハヤテ君が手を洗いに行った時を見計らって、アリスが耳打ちした。

きつと、私とハヤテ君を二人きりにするためにお昼寝という選択肢を選んでくれたに違いない。では、
レッツお料理よ！



「えーと、香りをつけるのがコリアンダー、カルダモン、クミン…。ターメリックは…コレは色付けなのね。なかなか面白いわねえ…」

「さすがアーたんだけあって、作り方からこだわるんだなあ。あ、ヒナギクさん。僕はお野菜を切つてますので！」

「うん、お願いね！」

レシピとにらめっこしてスパイスの調合をする私をハヤテ君は優しく見守ってくれていた。普段だと何を話せば良いのかとか、変な事を口走らないだろうかとか余計な事を考えている頭はカレーに集中してる分、ハヤテの姿を見る事しか出来なかった。それが逆にこの場の良い雰囲気を作る事になったんじゃないかと思う。やっぱり、カレーって偉大な存在だわ…。

「ヒナギクさん」

「ん、なあに？」

「アパートに住んでもらってから…これまで以上にヒナギクさんにはお世話になりっぱなしで…。ホント、感謝してもしきれないですよ。ありがとうございます！」

野菜を切りながら話しかける彼は、私の想い人。二人きり。手を伸ばせば届く距離にいる。

「ううん、私も楽しくやらせてもらってるし…。それに…」

「ん？」

「ううん、なんでもないの。さあ、ここからが本番よ。アシスタントよろしくね♪」

「お任せください！」

でも手は伸ばせない。いや、私が伸ばさないだけなのは分かっている。だけど、もう少しだけ…愛しい貴方を遠くから見つめていたい。片想いの自分に酔ってほしいの。



「出来たわ！」

「おお！ 良い香りですねぇ!! おいしそう…」

「やっと出来上がりですか? ううん、これは良い匂いですわ」

完成。アリス監修、桂ヒナギク特製カレー。

起こす手間も無くカレーの匂いにアリスが引き寄せられていた様子に、笑みが漏れた。

「自分で言うのもなんだけど、美味しいわね…」

「ホント、初めてでこう上手くはいかないものですよ」

「私のレシピにヒナギクさんの愛情がこもってるんですから、美味しいに決まっていますわよ。…おかわりですわ！」

「ウフフ、いっぱいあるから落ち着いて食べてね！」

アパート生活で始めての三人での食卓は、カレーの天使とちょっとしたスパイスで素晴らしいものとなったのだった。



「今日はありがとう、アリス」

就寝前、押入れを閉めようと手を伸ばしたアリスをさえぎって声をかけた。

「ん？ 私が何かしましたか？」

「ハヤテ君の事よ。久しぶりに彼とちゃんと話せたわ」

「私なんて、ただのきつかけにしか過ぎません。そのきつかけを活かすも殺すもヒナギクさん、貴女の頑張り次第でしたわよ？」

そのきつかけを作るのに、いったい何人の私が玉砕した事だろうかしら。

『『ヒナ』でいいわ』

「ん？」

「だから、『ヒナ』って呼んでって言ってるの。これからまだまだ一緒に過ごしてくんだから、仲良くしましょう。ね？」

出会ってまだ数日だけど、彼女とは縁の深くなりそうな予感がある。仲の良い人に「ヒナ」と呼んで欲しい私は、いち早く彼女からの呼ばれ方を正したいと思っていた。

「分かりましたわ、ヒナ。その素直さをもう少しハヤテに向けられたら良いんですけどねえ…」
「うう…」

凶星。何も言い返せない私にアリスはやれやれと溜め息をつく。

「まあいいですわ。私もハヤテの事で出来る事はしてあげます。ぎぶあんどていくってヤツですわ！」
「ん？ 私は貴女に何もしてないわよ？」

「一緒に住んでくれるだけで私の修行になってるので心配ご無用ですわ。では改めてよろしくですわ、ヒナ」

「うん、よろしくねアリス」

新しい家族とのこれからの生活、すると決めたからには楽しまないと確かに損よね。ハヤテ君とも…
もう少し仲良くなれたら…。

きつと、彼の心の中にいる人はもう動かないかもしれない。どんなに頑張っても私の心が傷付くだけ

なのかもしれない。

いつか来てしまう運命の日を、私はどんな顔をして迎えるのだろうか。でももう少し、もう少しだけこの穏やかな時間を過ごさせて欲しいの。

臆病な私の心に、ほんの少しの覚悟が出来るまでは…。

【おわり】

extra nightmare

春樹咲良

cloud

帰り支度を済ませて校門を出る頃には、辺りはもう随分薄暗くなっていた。

まだまだ日中の残暑は厳しく、暦の上ではとっくに秋だと言ってもそのような実感は特にわからない。それでも、夏至よりはもう秋分の方が近いのだ。日が暮れるのも少しずつ早くなっていくものだろう。

○

夕闇に照らされた空を見上げていると、不意に後ろから声をかけられた。

「あれ、ヒナギクさん、今からお帰りなんですか」

振り返るとそこに立っていたのは、やはりハヤテ君だ。何の気配も感じさせずに後ろに立たれることには、もう慣れたとしか言いようがない。

「ハヤテ君こそ、今から帰るの？ 随分遅いじゃない」

「いえ、お嬢様の忘れ物を取りに戻りました」

相変わらずの主人の様子についても、もう特にコメントが思い浮かばない。

「一体何度学校に忘れ物をするのよ、あの子は」

「さあ、物語の都合上必要になれば、何度でもじゃないですかね」

「そういうこと言わないの」

「ところで、ヒナギクさんが持っているその本は何ですか？」

そう言って、ハヤテ君は私が右手に抱えた文庫本を指さす。書店のカバーがかかったその本を顔の前に掲げて私は答える。

「ああ、そう、それこそ忘れ物なのよ。時計塔の近くのベンチに置いてあつてね」

見つけた時にはもう学務課は閉まっていたので、とりあえず明日届けるために預かっておくことにしたものだ。

「へえ、何て本ですか？」

「ん、これ？ 『浮雲』」

「そんな駆逐艦実装されましたっけ」

「何の話よ」

相変わらずよく分からない茶々を入れてくる人である。ハヤテ君や彼の主人であるナギをはじめ、私の周りには私を置いてけぼりにする小ネタを投げ続ける人が多すぎる。

それにしたって、どこぞの生徒会役員のように不真面目な生徒でもない限り、白皇に通う生徒が『浮雲』を知らないということはないだろう。

「二葉亭四迷の名作よ」

「くたばってしまえ？」

「……知ってて言ってるでしょ、それ」

あはは、と笑いながら頭をかくハヤテ君の様子を見ると、やはり改めて説明する必要はなさそうだ。

「二葉亭四迷」という一風変わったペンネームが、「くたばってしまえ」というセリフをもじったもの

であるということは、文学史に詳しい人でなくても聞いたことがある人が多いかもしれない。

ちなみに、世間でよく言われている「小説家なんて不安定な職業を選んだことを父に罵倒されたときのセリフ」というのはあくまで俗説であり、実際は『浮雲』の出版に際して自分の情けなさを罵って名乗ったものなのだと、物の本で読んだことがある。

「文学史に関する知識はひと通り知っていますけど、そういうエピソードがあつたとは知らなかつたですね」

帰り道を一緒に歩きながらそのようなトリビアを披露すると、ハヤテ君は感心した様子でそう言った。

「まあ、知っていてどうなることでもないけれどね」

「僕が二葉亭四迷に関して知っていることと言ったら、あとはそうですね——」

ややあつてから、ハヤテ君が人差し指を立てて言う。

『死んでもいい』

一瞬、ドキリとして立ち止まってしまった。ハヤテ君は、一歩先に進んでから、私の方を振り返って首を傾げる。

向こう側に沈みかけている夕日が逆光になって、ハヤテ君の表情がよく見えない。

「あれ、違いましたっけ」

「……合ってるわよ。“I love you”をそう訳したっていう話でしょ」

よく言われているエピソードの一つであるが、実はその出典はよくわかっていない——いや、今はそのようなことまで考えている余裕もなく、何とか動揺を立て直さなければならぬ。

そう、もしも私の顔が朱く染まっているとしても、それはきつと、夕日に照らされているからだ。

「そうそう、それです。一度聞くと忘れないインパクトがありますよね」

また歩き出した私に歩調を合わせて、ハヤテ君が続ける。

「……やっぱり、『二緒の墓に入るって前提』で合ってますよねえ？」

唐突にそんなことを言ったハヤテ君に私は少々の間絶句し、とりあえず何事もなかったかのように答える。

「……何の話かよくわからないんだけど、いきなりプロポーズの話になるのは飛躍しすぎなんじゃないかしら」

「うーん、それもそうですかねえ」

今更言うことでも無いのかもしれないが、この人の恋愛観というのが私には今ひとつよく分からない。必要以上に貞操関係に潔癖なところがあるのは……きつと、あの人の影響なのだろう。

「気の利いたセリフなんて、なかなか言おうと思っても言えないものですよね」

そんなハヤテ君の一言は、いつだって肝心なところで、デリカシーのない、余計なことを言ってはさら

なる厄介を生む彼を言い表すのに、あまりにもまとまり過ぎているように思えた。

「……そうね」

それでも私は、そう答えることしかできなかった。いや——

「——でも、言葉にしないと伝わらないことだって、きつと、あると思うわ」

口をつけて出た言葉は、ハヤテ君にはなく、自分に向けた言葉だったのかも知れない。

家が近づいてきたところで、とつぷりと日が暮れた夜空を何気なく見上げる。

「今日は……今日は、月は出ているかしらね」

同じように空を見上げたハヤテ君は、いつもよりも静かに、こう答えた。

「……さあ、どうでしたかね」

○

自室の机に向かって、『浮雲』のページをペラペラとめくる。

読むつもりで開いているわけではないので、目は印刷された文字の上を滑っているだけで、内容は特

に頭に入ってこない。大まかな話は知っているし、改めて読み返そうと思っっているわけでもない。

I love you.

「死んでもいい」というのは、随分とドラマティックで、呆れるほどロマンティックな名訳……と言っ
ていいのだろう。

もっとも、それが相手に伝わるかは、当然ながらその時の状況にもよる。

とてもドラマティックで、かつ素敵にロマンティックな場面でそれを言う機会があるなら、きっと「死
んでもいい」は素敵な愛の告白なのだと言える。

恐らく、これまでの自分の経験から考えて、なかなかそういう機会に恵まれるということはないと思
われるが。

いや、「死んでもいい」に限らず、これまでに世界中で用いられてきた「I love you」と同じ場面など、あ
るはずもないのだ。

十人いれば十通りの、「I love you」の名訳があつて然るべき——なんてことを言ったところで、どうな
ることでもないのだが。

それはつまり、取りも直さず——自分の言葉で、「それ」が言えなければ意味は無いのだということだ。

自分の中では、それはどうの昔にわかっていることなのだけど――

「……離れないでいて。ずっとそばにいて」

小さく呟いた言葉は、まだ誰にも届かない。

あとがき

(※掲載順、敬称略)

こんにちは！初めましての方は初めまして！
みっちょです！

今回はギリギリの参加で本当に申し訳ないです

内容はお祭り&花火です！

夏らしい感じとハヤヒナ本なので甘甘させたかった

べたな演出が多いですがまあ、そこは御愛嬌ということで(笑)

久々にハヤヒナ書くとヒナギクのしゃべり方とか忘れてますね

もつと数書かなければ上達しないとは思いますがなかなか：

あ、青うさぎさんについては実は今、ドハマリ中のアニメから引っ張ってきました

青いうさぎが出てるわけではないので連想な感じですが(笑)

気になる方は私の茶会のアイコンを見ていただければわかると思います(笑)

最後になりますが、この合同本に参加した皆様、企画してくださった春樹咲良さん、そして読んで下さった皆様、本当にありがとうございます！

お礼の言葉とともにあとがきを締めさせていただきます

(みっちよ)

こんにちは、管理人ではなく一介のSS書きとして参加させていただきました、双剣士と申します。

ハヤテSSを書くのはこれが121本目に当たるわけですが、私のSSでは桂ヒナギクは大抵ギャグキャラの扱いになっています。今回ハヤヒナ合同本に寄稿するということで、彼女をヒロインらしく書いてみようと思ってみました……気がつくとも単行本4巻のハヤテとの出会いのシーンを丸ごと喧嘩腰として解釈するような物語になってしまいました。

まあ読者から見ればその気ありまくりでも、ヒナギク本人はあのとときの感情を断固として否定するんでしょうから（ここらへんが男子小学生なんだよなあ）ハヤテのことを特別扱いしつつも恋じやないって思い込もうとしている当時の彼女の内心を描写すると、だいたいこんな感じになるんじゃないでしょうかね？

ちよっぴり間抜けでものごく意地っ張りな彼女の気持ち、堪能いただけただけなら嬉しいです。

ちなみにこの物語は、拙作「伝説の始まり」「暇つぶしの始まり」で記した伏線と、ほんの少しだけ繋がっています。お時間のある方は読み比べてみて、繋がってる部分を感じ取ってみてくださいと、作者としては望外の幸せです。

最後にハヤヒナ合同本の企画を申し出てくださった春樹咲良さん、そして本企画に賛同して下さった書き手や描き手の皆さんに、厚く御礼を申し上げます。

(双剣士)

無謀にも、ハヤヒナ合同本イベントに参加させていただきました。

色々考えた挙句、恋愛ものというごくシンプルな構成を選択。ハヤヒナならこのジャンルしかないだろうという判断でしたが、私の実力でどこまで出来たのかはちよっと判断に苦しむところ。相も変わず修行不足がたたっています。以前別の小説で恋愛ものはやっちゃったので絞り出すのに本当に苦労しました。

結局今までやってきた中から寄せて集めたみたいになってしまいましたが(高所恐怖症の下りとか、

以前のホラーもどきそのまんま。引き出し少なすぎて泣きそうでした。なんとかギリギリ形に出来て良かったです、

また別の機会があれば、今度はいつも通りイロモノにでも逃げようかと企んでいます（笑）

それでは、ピースケでした。

（ピースケ）

にゃんぱすー、RRです。

このたびは合同本の発刊たいへんおめでとございます。

ハヤヒナという個人的にも非常に思い入れの深いジャンルで、楽しく参加できました。

…というのは建前で、すまぬ…すまぬ…。仮投稿したのが締め切り約2時間前。色々あった月だったにしても数日前にはと思っていたのですが…はるさく殿にはご迷惑をおかけしました。次回はもつとちやんとします（口約束）

さて、SSについてです。ハヤヒナと言いつつも「アリスちゃんがヒナギクを『ヒナ』と呼ぶまでの話」になってしまってます。

さらに41巻での「それはもう私がカレー大好きだから」というアリスちゃんのセリフから、『みなみけ』のカレーの妖精ネタ・レッツお野菜ネタをインスパイアさせてもらってます。

そして申し訳程度のヒナギク片想いモノログ。うーん、この…。

改めて一話完結の難しさを思い知るきっかけとなりました。まだまだ精進が足りませんな。

ではでは、ここまでありがとうございます。おにゃんぱすー。

(ロッキー・ラックーン)

いつもお世話になっております。春樹咲良です。

合同本の企画をぶちあげたはいいものの、いざ自分が掲載する予定の原稿に取り掛かろうとすると、なかなか筆が進まず……当初の予定とは少し変わってしまいました。止まり木小説掲示板で連載中の拙作『secret nightmare』の番外編という形に落ち着きました。基本的に各話独立になっているので、もし興味を持って頂けましたら、連載の方もご覧いただけたらと思います。大体いつもこんな感じの

雰囲気を書いていきます。

内容としては、『Secret nightmare [2]』の話がまさかの本編とのネタ被りという事態を引き起こしたことを逆手に取ってみようとしたわけですが、今度はまさかの合同本内ネタ被り……（苦笑）。

短いお話になってしまいました。楽しんで頂けていたら幸いです。

このような形で初めての合同本参加となりましたが、次回以降も何らかの形で関わっていければと考えております。

今後ともよろしくお願い致します。

（春樹咲良）

編集後記

改めまして、春樹咲良です。

そもそも今回の企画の発端は、前回の止まり木合同本（ピンゴ大会）の掲載権をギリギリで得られなかったことに業を煮やした首謀者が、「だったら自分で合同本作ればいいんじゃないか」という思いつきを企画としてぶちあげたというものなのですが、始まってみるとなかなかどうして、大変なことの連続でした。

止まり木管理人の双剣士さんには、普段から何かとお世話になっていますが、今回は特にお世話になりました。というか、これまで5回に渡って公開されてきた止まり木合同本のことを思うと、その計り知れない苦勞が身にしみて感じられた次第です。改めて、感謝申し上げます。

初めての企画で不備も多く、ギリギリまでどうなるか分からない綱渡りの運営をしてきましたが、多くの皆さんのご協力によって、無事に合同本として公開に至りました。お世話になった全ての方に厚く御礼申し上げます。

（春樹咲良）

第1回 ハヤヒナ合同本

2014年8月17日 発行

表紙イラスト ピーすけ

編集 春樹咲良

公開 ひなゆめファンの止まり木

(<http://soukensi.net/perch/>)